小川為治著述

開化問答

下

小川為治著述　開化問答巻下

開次郎

さて一服やらかしましたからまた御談義をはじめませうそこで今の御論では當時政府に御取立なされる諸運上は皆無理なばかりでなんでも是迄通り百姓の諸年貢ばかりをとりなされば御仁政でなんといひなされまするが失禮ながらそれが第一の心得違といふものでござれば何故といふに

先刻から口が酸くなるほど御話の通り今天子様の御政事を施し給ふハ皆民百姓我々の為でござるさすれバ年貢運上を御取立なさるも矢張民百姓我々の為でござるそのわけハ甚知り易きことなり今上に政府といふ物がなく世の中を取締する者がなければ世間ハ暗闇にて押込盗賊ハ勿論人を殺しても咎ることもなく我物を奪ハ逃るも訴へるとも術がござりませぬされバ金銭を貯へるとも作りたる田地田畑を所持するとも出来ぬ実に弱き人ハ詮方なく餓死するすゑと

に落入ませう若しまた試にこれらの害を防がんと思へバ夥多の金銭を抛ち盗賊の番人やら田地の番人やら大勢召抱へておき始終心配して氣を附て居なくてハなり升まひおそれハかゝる患ひもなく萬民枕を安く家業を營まれるハこれ上に天子様がましまし政府に諸役人が備はりそれぞれ諸政事を施し給ふゆゑの事なく實に些少の年貢運上を出しおくるに大なる恩恵を受ると思へバ世の中に諸政事ほどに安き物ハござりませんまゝ世の中の仕組ハ

何事をするにつけても入用がますくさハかならぬ筈なく天子様の法政事をなさるにも諸役人の月給から紙筆墨其外の物に至るまでの入用ハ日本國中へ割合出させるよりほかの仕法ハござりません何故なれバ國中惣躰より出させるといふものハ是色々の仕事ハ日本國中の人へ関係ある仕事にかゝる大仕事をうけもつべき人等が大勢寄合てなしたらバ混雑のことを生じ纏りが付ぬゆゑ天子様ほか一人に御頼ミたてまつる政府ハ人民の仕事を取扱ふ場所天子

様は請負人の頭取ておぼへされば政府がなければま
ぞらの仕事を銘々各々一家ぐ引受取扱はねばならぬ
おとなしく年貢運上を出すは恰も己のすべき仕事
を人に頼みて其入費を辨へると同様ておぼへれ
さるなり又政府の恵を受ながら百姓町人皆同様なるに
今まで百姓のみ年貢を出せしは實に不理にまづれゐ
るおとなしくてはおぎなふ人がなけれゆゑ追々百姓が耕作を
きらひ職人商人に業を傳へ終に産物の出来
がすくなくなり随て職人商人の家業も衰微す

ることてむづかしき元来田地を耕作して一ヶ年千両の収納を得る百姓が百両の年貢を出せバ商売をなしても仕事をもなすなれバ千両の儲ある商人職人ハ同じく百両の年貢を出してよろしき筈でござる それわけハいかにと知らせ申さん きさまとても百姓丁人も同様に政府の恵をうけ同様に日本の土地に住居なし同様に日本人の権利を保ち皆同様に安穏に家業を営むゆゑておぼしめさるれバ是迄百姓のミ年貢を出せしハ實に不公平なことにして終に國の産物も衰微す

るゆゑ成行にしてござるさてそれからハ政府にて租税を收納する有様を御話申ませう先租税には二種の區別を立て御取上なさる事でござる一を私有税といふ是ハ人々の家屋に付て取立る運上にして田地家作の類の運上をいふなり二を物品税といふなり是ハ絹茶蠶卵紙の類すべて産物より收る運上をいふ物品税ハ人間必用の品物なれバなくてならざる規則にて其のかハり税物の類奢侈に屬する物なれバ重き運上を取立るでござる譬へバ五穀紙油の類なれバ運上をとらぬん

しるし金銀の細工菓子酒煙草の類芝居寄場に坐敷娼妓藝妓杯にハ重き運上をとるとてなさる何故これらの物かくかく重き運上を取るといふにまことふれ此物ハ畢竟人の情を慰るまでの用なれバたとへまぢらふれ此物がなきとて人間の生活にさまたげがあることもなく、よく〳〵勘考して見ると無益に属する物でなぐさみぐさにする今日の場合なくまさらの物を廃止ることにハゆかぬゆゑ只是等の物より重き運上を取立國用の助るなしとてある殊に貸坐敷渡

世娼妓藝妓の属は遊民といふて世間の為に何の益も
なさゞるもだめしくひてござるされど無理にその家業
を禁止ては当人の自由を妨るわけに落入政府にて
も済ぬことゆゑただ殊更重き運上を取自然正経
の家業を営むやうさせるのでござるさて前にもお
話し通り日本中の人が政府の為に年貢運上を納
るは詰り己の仕事を天子様へ御頼ミ申おきその
入用を弁へるためなれば銘々家産の大小に従ひ公
平に割合出銀するは当然の理合でござる且天子様


性理大全
月落
姑蘇


應需
惺々暁斎

ハ衣服を始取立物までも始自分様の栄耀栄花に御用ひなさる丈ハ更に多く御自分さまハ宮内省と云ふ御役所の御賄ひにて一年總六十萬両位の御くらしておゐでなさる何と勿躰なきものゝ御俸給でハ出さりませんかその餘ハ悉く政府の入用とする譬へバ大蔵省なくハ農業を勧め産物を殖やし通用金を製造し世間の融通をよくし年貢運上を取立國用を足す等の入用があり文部省なくハ世の人の學問を勧め智識を明にさせ人々の幸福を増させべく世話する

入用がござるその他諸役所よりハそれ〴〵の受持がありてその仕事を行ふ費用ハ皆銘々よりて納めてハ年貢運上など辨じられましてござりますれバ足下の彼是議論しなさりますに理窟ハみな僻論なく正直の道理をえんなさりぬゆゑかと思ひ升

㊄舊平

段々とのおさとりくだきよく呑込ましてダガ僕ハまだ口を噤で嘴をいれるにハゆきませんそれハなんだかといふに交易がありてござる僕の考へにハ天子様お直に

御政事をなさるやうになつたからは是迄公方様の御可愛がりなされた西洋人等ハ直に御擯攘になるだらうと思ひて楽んで居外しらぬ矢張以前の公方様と同じ事になつておまけに御一新以来ハ交易場の数も殖え当時でハ丁度五ヶ所でござるナント御手前にハ更に合点の行ぬはなしでハござりませんかある方の御話に元来の日本といふ國ハ神國でござるから日本人の知恵といふものハ中々西洋人等のおよびもなきものにして物事何も角も十分に備て何一つ不足のない世界随一の國

ござりてござる　それで慾乃深い西洋人等ハ己が悪國て物事不足だらけぐ物ばかり世界中乃國〻から唯一ッ乃日本國を目掛て来て彼奴等乃國乃何乃益にも立ない品物を持渡り日本乃結搆なる品〻を買出し追〻日本乃諸品を買盡し結局ハ日本國を乗取ふとい不届千萬な企をするものでござるさて近来諸色が払底になる物乃直段ハこれ迄乃二増倍三増倍にもなりて誰も彼もこまりて難渋して居り升るこれ皆彼奴等乃仕業でござる　これ不

じ悪い西洋人等をなんで天子様ハ大事になさるゝく彼奴等乃いふ通りになさるまじゆうトントわけがわからぬはしよふなく此の舊平抔ハ藥罐頭が沸騰るやうに思ハ升

開次郎

舊平君足下までが正真の道理をしんなさらぬゆゑかのある疑乃生じることなくあんなにはまらぬ僻論を強く言立をなさるまゝると謗にいふ闇黒乃恥を白日へ出すやうなるものゝごとく詰り足下乃頑固がつのかり却つて人

に笑ハるゝ事もかしと思ひ外何故足下の言葉にか僻
論だといふにもと天子様が外國の交易を御許なき
つたるわけ柄といふハ畢竟天道様の御趣意ふおよ
たがひなさる事でござるそのわけハ先人間といふ
ものハ一人でハとても世を渡られぬ筈のものにて
その證據ハ一人の身にハ衣服も入用なれバ食類も
入用なり又住居も入用でござる其手前の品物を
得るにとしても一人して悉く製造ることハゆかぬゆゑ
各自にハ自分の一ツの家業を營て自分の製造し

餘分の品物を以て己の欲しく思ふ品物と取替へ用を足すなりとて然ざるその取替へるに就ては近所鄰家又は五十里百里さきの人とも取替へねばならぬゆゑすべて人間交易の源天道様の思召でござる又人間には父母兄弟といふものがありてそれから親類といふものがあまた出来それが段々繁殖て遂に一郷一國をなしたるゆゑに今でも田舎には一村悉く親類ぞなどいふ場所がいくらもあることでござりまれさすれば世界の出来るはじめといふは天御中主神といふ

神様がありそれから高産霊神神産霊神といふ二人の神様がましまして其の神様の徳によりて此地球も出来人間といふものも出来るといふことなれバ源に溯りて見れバ西洋人だとても元我々と一種の親族でありしが世を経るに従ひ名もしらぬ国の人になりてしまふまでのことでござるそれゆゑ人間の親子兄弟親類に交際も近所隣家の人に交際も五十里百里さきの人に交際も西洋人に交際もつまりハ同じことにてすこしも違ひ又全く天道様の思召でござりまする

是迄日本ハ日本だけで何一ッ不自由なく居るのに外國と交易がはじまつて諸色高直になり下々が難渋するといふハわかりません何故といふに人間ハ一日も交易せねバ居られぬものゆゑ交易とハ自分の餘分なる品物を以て自分の乏しく思ふ品物と取替へる事とでござるされども世のひらけはじめの交易ハ云ゆる物と物との取替へにて譬へハ穀屋の米八ハ己の餘分なる米を以て紙やの半四郎の紙と取替へ織物屋の杢助ハ己の餘分なる織物を以て金物屋の

鉄蔵乃刃物鍋釜と取替へるかくまじめい物と物
との取替へむしろく居た所が段々と不都合乃ことも
のも多きゆゑ又一つ乃知恵を生じ通用金といふも
のを製造たるもけてすいきる通用金があれバ我餘
ぶの品物を通用金ふ取替へおき何時ふても不
しき品物を入用だけ求るすいとか出来るゆゑ以前と
ハ百倍乃便利を増さいとてすいぎるさうく通用金が
出来さるゆゑ賣買交易抔とふ名目も出来人も
賣買交易おすどふ事乃大本をもいぬさいとふあつた

けれど矢張以前の物と物との取替へに聊も違ひなし
金銭さへあれバ人々が日々に入用する品物を売買す
るハ矢張古の交易なくて今でハ交易といへバ西洋
人と売買する事乃様にのミ思ふハ大いなる誤でござ
ざる又西洋人と交易をせねバならぬといふハ試に考
へてごらんなさい今古に何か子細があつて人々日用
品乃売買の出来ぬやう乃事件があつたらバ各々乃
難渋ハ勿論終にこの世に人種が尽るやうに成行ませう
ナント此等乃理合を能知人たちなれバ交易ハ天道

様の法趣意ふて人間の大利益をする物だといふ事ハよくわかりませうさすれバ日本同士交易するも西洋人と交易するのも只大きいと小さいの相違のミ少しく理合ハ同し事ゆゑ天道様の法趣意ふ従ひ人間の幸福を増さんための仕業でござるをさせふ頑固なる人ハやはり日本ハ日本だけでゆふ一ッ不自由なく杯まをさるゝ外ハ皆理をしらぬ言葉でござる既ふ不自由のあつた験ハ天保年中の饑饉を法考へなさるせ外たの時ハ道傍ふ行倒れて居る者が山のやうふあつたと申外さる

ふ慶應年中の不作にハ外國米の御蔭を以て一人も餓死するものハござりませんナントさせてもなふ一ツ不自由ないとまをさせませうかさせ皆天道様の御趣意を守ると守らぬとによることでござります今是に由て考へて見れバ天保年中の饑饉ハ丁度一人者が常時親類や近隣と交際ずに居て病に罹りたる時誰一人看病するものもなく終に死に陥たると同様なるハ誠に悲しいことでハござらぬか且人間といふものハ段々開けて来るに従て物事の全体

するのを好む天性がある者ぐから唯一通り入用な物
ばかりでは用が足りませんそれを一通りの物ばかりです
むといふは詳に開けぬ國のまゝでござる今日入用な
物ばかりかぞへれば米味噌醤油薪炭油の數箇の
數品でござるされバ衣類抔も木綿でこしらへたのが
一二枚家居も竹の椽に茅の屋根など用の足りると
いふだけなれど從ひ人のその通りに行はなくて己が勉強
によりて自然饒福になれバ衣類も木綿よりて紬つむぎ
より縮緬と段々美物を着用し家居も木作りより

土蔵土瓶よりも石作りと段々美室に居ることを好むハあながち天然にして人間の天性でござる譬へバ煙草といふものハ昔し慶長の頃外国からはじめて種がわたり九州邊にて作りそめたるものにてその後火災の恐があるといふて徳川三代の公方様の頃にハ度々作ることを禁止たれどもついに廢止ることが出来ず今てハ日用の一品にて煙草烟草入喜世留の数を賣買して渡世する者数へ盡されぬ人などでハあらざるべくかその外女の櫛笄などの属ハ實に奢をきはめて

このて是皆世の開けたるしるしにてござるさすれバ舶来の薬種砂糖鉄類羅紗西洋木綿時斗石鹸の類もまた今日の日用物なれバ今急に交易を御禁止になされバ田舎ハさて置東京抔にてハ忽差支るものが沢山あるとてござるさすれバ政府にて外国交易を御開きなさつたるハ畢竟銘々の為に互に不足しき物を取替へ物事を全備して人間の歓楽を増させんための事にて五ヶ所の交易場にてハまだ不足に候てござるさて徳川家でハまじめに外国と交易を

法開きに相成まする頃ハ諸色が急に高直に相成り世の人がいろいろ難渋を唱へましたが其の頃におよんてハ物事に段々折合がつき諸色も追々下落し誰一人難渋をいふ者ハないやうになり升く是諸品の売方がよき所から元方の人々が皆精を出し追々品物の仕出しが沢山になつて来るゆゑますます其の末とも銘々精を出して色々の品物を製造へ外國と交易ますれバ一人の富ばかりでハなく日本國中の富に成り遂に日本ハ世界一番の富國になる事とふく〱よく〱

考へ者ハありがたきまとしておぢやる

㊅舊平　足下乃御理解なく外國と交易乃理合をはかり僕乃是迄乃疑ひハ大抵とけ升したれどもまづ／＼措黙て引込ミけふハゆき升せんそれハあの幕政府なく所々へ學校を御取建なさりまし下々へ學問をするやう御世話なさる學問をする事ハよい事だとハ聞て居り升しが當時御上より御勸なさる學問ハみんな横文字みなく一寸見てハ蚯蚓がのたくつて居るやうなる文字

ばかり是迄乃學問ハ皆淸廢して四書五經抔いふものハ手にとるものもなきとのことさうして見ると日本乃是迄乃書籍といふ物ハ益ニ立ぬ物でござるからそんな益ニ立ぬ物なら今迄人々が珍重する筈もなし儒者や學者を尊敬するわけもござりますまいきさまらハ政府で西洋ずきのところからなんでも彼奴等乃物ならなんでもよきことだと思ひ大ニ妖惑されてゐるところでハござりませんか

開次郎

成程此等乃疑ひ一應ハ済む乃やうに聞ゆれど是に
ハ深き理合乃あるものにてござる先文字といふものハ人
の意を達し世乃中乃理合を知るため乃道具なれ
ば言葉乃かハりを書し物にてござるそれを漢土乃文
字といふ物ハその數三萬六千もあるよしなれバその文
字を用るにも用を足さんと思ふ者ハ文字を知る爲に
二年三年乃日數を費やさねハならぬほどにてござる又
日本乃いろはハ四十七文字西洋乃横文字ハ二十六
文字なれバ日本や西洋の字を知るハ一月もかゝれバ

出来るたけりなく其の得失を考へ見ハむづかしき文字乃為に余斗なる光陰を費やせハ真に無益なることてならざるもと文字といふ物ハ前にも御話の通り世の中乃理を知る為乃道具なれバ恰も大工や左官乃鑿鉋泥鏝抔と同じ様なる物でござる今大工や左官が道具ばかり沢山所持して居てもとても家を作ることや壁を塗ることをしらなけれバ用に立升まひ学問とても同じこといか程むづかしき文字を沢山知ていても理合をしらねバ用に立ません其通りに道具ばかりの穿

鑿に二年三年費やすハ馬鹿の上なし痴獣の親玉とも申ませう是漢文字の不便なるところでござる又學問とハ唯むづかしき文字を知り解しこのごとき古文をよくよく和歌を詠し詩を作るなど世上に實のなき文學をのみ主としてハござりませぬこれらの文學も随分人の為になることもあれども古来世間の儒者和學者なとの申程さうまでながめ尊むべきものではござらぬ昔しより漢學者に世帯持の上手なるものも少く和歌をよくして商賣に巧者なる町人

も稀てござるなりしゆゑ心ある百姓丁人ハその子乃學問
ふ出精するを見てやがて身代を持崩すならんと親
心ふ心配するものもありて無理ならぬわけてござる
されその學問の實ふ遠く日用の間ふ合ぬ論據て
ござる今かゝる實なき學問ハさしおき専ら勉むべ
きハ人間普通日用乃學問てござる譬へバいろは四
十七文字を習ひ手紙乃文言帳合乃仕方算盤乃
稽古天秤乃取扱等を心得なれ又ある人で學むべき
箇條ハまだつまりくら多くござる地理學とハ日本國中ハ

勿論世界萬國乃風土道案内究理學とハ天地萬物乃性質を見分その働を志る學問歴史とハ年代記乃くハしき物にて萬國古今乃有様を詮索する書物經濟學とハ一身一家乃世帯より一國天下乃世帯の持かたを說くもの修身學とハ身乃行ひを修め人に交りての世を渡る心得天然乃道理を述たるものなり是等の學問ハ人乃貴賤にかゝはらず一般に知らで叶はぬものなれバまでに學問乃すゝめといふ本に委に記載してあれバ何故ありて學問乃事をいはでかなはぬといふに譬へバ寒氣乃強き時などハ寒さを防がんが為障子を閉

密て火を盛にあたりし大勢群ッて居者ハ皆かならず逆上して鼻血を出すやうなることがござるなり空氣が流通せぬ炭素といふ物が外へ出ぬゆゑなり究理學を志す人ハざきるにたの理を悟りましてござる又人といふものバ前日の儲を貯へて今日の生活をする營のもとなりハ無益なることに一銭も用ひず今日の儲を溜ておいてまして後日の患に備へせねばならぬことでござるための理合をしるハ經濟學なり經濟學を志す人ハ他人の異見を受るに及ばず自然自分から質素儉約をするもと

てござりますナニト　さやうならハ皆學問の力てハござりませんか
そのなか百姓なぞハ耕作の爲是迄の仕方をとかく改正
しく方が取上高も殖え手數もかゝらぬと此等の事を
考へますにハ植物學地質學化學抔入用なり職人なぞハ
此東ハ在来の造り方をとかく改正した方が手輕く
しく便利なるにしかゝる事を考へるにハ器械學入用
なり商人なぞハ其の品物ハ何國の出来にて製法ハ
元手ハ何程位かゝり世間へ一ヶ年の賣レ高ハ何程位
と此等のさしひきを考へるにハ地理學物產學抔入用なり

すべてこゝに云ふ此等の學問ハ今迄日本人乃氣が附ぬことなるから皆西洋人乃考へ出しゝ事なれバ此等の學問をするに何れも西洋乃翻譯書を取調べ大抵乃事ハ日本乃假名まじりに用を便じ或ハ年少なりとも文才あるものへハ横文字をも讀ませ一科一學も實事を押へその事に就きその物に從ひ近く物事乃道理を知りなば今日乃用を達しさせるやうするが肝要でござる右ハ人間普通乃實學なれば人たるものハ皆悉くたしなむべき心得でござるその心得ありし後に四民ともども乃職分に

ある人ハ家業を營ミ次第に繁昌なしつひに獨立不羈の
人間となりたるもあまたあり漢土の學問も隨分よき
ものにあれバ人の爲になる事もあるなれど究竟
理合ハさのミ程のものにあらねバ文字のむづかしく
骨折ほど利益を較ぶれバ到底利益ハすくなきことゆゑ
まづさて今でハ强ち請上げたハ漢學をバ請度ハ寄ますまいと
いふ事ハござりません只西洋の學問ばかしく方が日用の
益になり身の爲になることゆゑ專らこれへ請道ずるあ
まるでけれど古来より學問の道ハ博を厭ハずして中

外から力があつても根氣のよき人ハその人の了簡次第和漢洋ともひろく學ぶがよろしい事でござる唯普通の人の學問ハ理合を知るを專一としまして假名拵らへ用を足す方が便利ゆゑ御上でも其の御趣意を以て所々へ學校を取設讀め易き文字にて人間日用の為になる學問を教へ人才を御育なさるゝおしらせでござる其れを西洋人に妖惑されて居る抔といはるゝハ畢竟學問の理合を知んなさらぬ足下の頑愚と申ものでござる

（七）舊平

妙々足下乃清講釈まて西洋乃学問を学ぶわけハさ
つぽりとつかりましく志かしそれヰに就てハもう一議論
せねバならぬことがござるそれハ此の頃世間乃風俗を見
るにまア是迄乃家作を西洋風に作りかへ頭ハ散髪
わく身躰にハ筒袖細袴を纏ひ食物ハ牛乃油煎が
よい乃家乃煮附にしよふ乃とのふく居る外ナシ是
てハまるで西洋人に随従してしまふとふ中ふふく真
に歎かハしいことてハおぜうとんか是迄四足を食ふく

ハ神様の罰があたる穢ハしい物だと日本の人ハ誰も食ふ者ハござらぬたまたま薬食に猪など食へバ三日の間ハ神様へ手を合せる事も出来ぬ程のおそろしく今迄であつた神國の貴いところがあるといふものでござる夫迄を此節でハ四迄牛鍋ぐらゐか豕鍋なしか牛の乳がよいのなんぞのかどのといひちらしその口を漱もせず神棚へ向ひていか程拜禮をとげるいか程拜禮をなしとてもなんで神様が承知なさりませう罰の當らぬハこの人の幸でござる又家作りも是迄日本ハ日

本だけ尓いくらも調法な作り方もあり立派な作り方もござるそれをやき煉化石どの石作りだのいろ〳〵無益尓高い金銭を費やし何乃利益がありませぬ唯其家尓住居し〳〵髭でも生しやたら尓西洋人を真似るよりか功能ハござり升まい又衣服もさうだ冬ハ綿入夏ハ単物と日本人ハ日本服で沢山用が足りて居り升それを世乃生物識乃半生熟な奴等ハ今ハ急尓氣乃附くやう窄袖細袴を着用なし蝙蝠傘を手尓持驕慢な面付をして偶恒體乃衣服を着てゐる

人に逢へハ開けぬとか野蛮だとかいひあの人等の仲
間からハ人間でないやうに申され居り升殊に異風の
ハ散髪でござるもとハ人の女房でも盗ミや詐がないと
いふ人ハ時ハ頭を剃おろし坊主になつて詫ことしてござる
さうせバ当時の人ハこま悪事をも働き下心を以て転
ぬ先の前杖にかく散髪になりしてまとまり何にまる合
点のゆかぬ了簡でござるその僻みらしく高慢らしく散髪
にすれバもう直に物識りのふりをなし申せ文明だとか
開化だとか開けたとか開けぬとかトント白痴が新田

開發をするゆゑなどゝ思ふて居り升ときハ是等ハ皆余計なる仕事のやうなる了簡も無く無益に西洋人の真似をする人等が多くなるときハ自然人情が浮薄になり徳實なる心ハ失へて終ハ真實西洋人に随從ふやうになり行きますときハ矢張是迄通り髮を結ひ袖のある衣服を着用なし西洋風の家作を禁じ四足ハ食ぬやう法令のあつた方がよいかと思ひ升

開次郎

成程足下の理窟ハ一應ハ趣のやうに聞ゆれどもまだ





正真の理合ハ更に知りなさらぬゆゑでござる先食物と云者ハ畢竟身躰の滋養に食ふものなれバなんでも身躰の為になる物を食はねバならぬものにてござるそれを日本の食物しる者ハ只口にうまきなどを専一として養生抔のことハ聊もかまいませぬゆゑ日本人ハ根氣弱く西洋人のやうに蒸氣船や傳信機抔の大發明をなす事ハ出來ませんさて第一身躰の滋養になる品よき食物ハ牛肉牛乳豕肉鳥肉の類なれバ西洋人が化學とかいふ物の原質を取調べる學問なく悉

く調へ卿疑のないことでござる又昔しハ獣の肉を食ハぬといふハよく古しへを志らぬ人の言葉でござる既に古語拾遺といふ書籍に大國主神の営田の日に宍を以て田を作る人に食はしめ給へることがござる又人の世となりてハ仁徳天皇様ハ兎餓野の鹿の声を聞て給ふの肉を召上るに忍びたまハん孝徳天皇様ハ牛の乳を飲みたまひてちゝを献じしものに和薬使主といふ氏姓をたまわりし抔いにしへ獣肉や牛乳を用ゐ給ひし證據なく皆悉く書物に書載てござる特に今でも信

州諏訪の祭にハ百疋の鹿の頭を備へる事がござる夫れ神代の遺風なるいにしへより獣肉を忌まぬなるべしでござるさすれバ穢などいふ事ハ佛法が傳りて以来坊主等のいひ出せし事にて取に足らぬ事にてござる又當節家作なさるに強西洋の風を真似るといふ訳ハござらんけれども今迄の家作ハ第一火事の患があるし第二に養生の法に適ぬゆゑ身躰の為を思ふ人ハ追々西洋風に立かへる事にて又考へて御覧なさい是迄の土蔵を作ると西洋風の普請をすると

いづれが安直に出来升かされバなかにハ無益に金銭を費やすといふ理ハござり升まひそれにまづ一ツ申すとがおこるもと流行病といふものハ水溜りや腐廃物の太陽にてらされその蒸發氣を人が嗅込でそれから發るなどゝておこる又空氣といふ物ハ大切なるものゆゑ空氣がなかりせバ人間ハ生活て居ることが出来ませんそれゆゑ家作ハつとめて空氣の流通するやう水溜りや腐廃物の清潔に掃除の出来るやうにしておくが肝要でござるそれを是迄の家作の仕方にてハトント

むちやくちやむらく床ハ低し風ハ入られ椽の下ニハ水が湛へて居る腐敗物ハ家の周圍ニ棄てあるナント是でハ年中藥を病人の絶えぬハあたりまへのことでハおざりませんか筒袖や細袴を着用まちまちをゆかれしくいおるゝが其證もきこえぬありておざる先日本乃大古しの風俗ハころも筒袖みじかく頭も惣髪の撫下げでおざざる其證ハ古き画抔も見えるし書物なども證據が澤山おりまする其證が中古より漢土の風が移り袖も長く髪も結ふやうになりておざる半髪野郎頭となり

もの八乱世乃陋しき風なくやうやく三四百年以来乃
あらておざるさらく人といふものハ便利を専一にせねバ
なりぬものなく譬へバ物を運ぶに荷ふよりハ車乃方
が便利よき故自然車を用ゆるやうに成行ましたなく
萬事にも同じ事でおざるあるきゆゑ長い袖のぶら〱
ちゆふしくて邪魔になるより誰も便利よき窄袖を
着用するやうになくあるきも不便でも長い袖の衣服を
着るといたすならバ世乃中の仕事皆便利を捨て
不便利なることへ立戻らねバなりませぬされバ百

姓ハ便利な鋤鍬を舎て手を以て田を作り職人ハ便利な鉋鋸を舎て手を以て家を作るナント夫んな馬鹿なことを誰も承知するものハござりませんさされバ散髪乃話に移りませう先散髪にすれバ養生も便利倹約の三徳がござる第一養生とハ人間乃頭脳ハ精神乃住居なれバ大切なものでござるそれゆゑ天道様が造へるにおく大丈夫なる骨を組合せ其上に皮を覆ひ又髪乃毛を覆ひ又其上に帽子を冠る是大切にする事を人に示せる自然乃妙理て

けがさるゝゆゑ也を月代を剃ながら日にてらさるゝ露霜に
うたれ甚てハ一寸考へても天道様の意に悖り不養
生の事にて然ばむざむざ人々が第二便利といふハ一寸他へゆくに
も髪結の手を待ず我手ばやく撫付用が足り外
第三倹約といふハ油元結の冗費を省き殊に夏向ハ鬢
付油の蒸発臭き匂ひもなく誠に愉快なことでおざ
ざる ナント是等にても散髪の利益ハわかりましたらう
うきやう段々清語が通り肉類ハ養生の為に食ら
ふに付殊に昔しはすでに天子様もとめ召上らせしなど

西洋風の家作窄袖散髪とてさもあれ便利養生の為をなさずとも且窄袖散髪ハ日本の古風なれバ強而西洋を真似るといふわけもなきなりされバ足下の法論ハこなた本を正さぬ誤にて一ツも理に合ぬありて些なる併しながら世の半熟先生ハ此等のわけも知らず只背替に開化めかす人もありて真の物識の眼にハ片腹痛きものも多いて些なる事ども自然と此等の規則にかなへハまく當人の為にハいか程か利益あるものなく他の偏屈に凝結て居る人もまく幾等の徳を

得るが出来ません唯ねがハくハ此等の人半生熟なる浮薄心をやめ真實ニその利益を受るやうにいたしたうござる

㈧舊平

足下の御話ハことごとく御尤も至極よく呑込ました僕も今迄ハそんな道理ハ分らず唯昔し堅氣の偏屈から此頃の者とハなんでも皆異風なてるきやうニ思ふて居たが今の御理解で始て夢がさめましたさりながのうまく一ツどうも僕の胸ニ落ない事がござるそれハ

なんだといふに蒸氣車や傳信機の事でござる。世間の噂をきくに鉄道を造るには人を生埋にしなければ出来ぬ傳信機ハ女の生血を銅線へぬるゆゑ遠方へ音信が通じる是皆切支丹の仕法なりと西洋人が此等の事を日本人に見せ膽をつぶさせその虚に乗じ日本を奪ふなどといふ不届至極なる計畧などゝ申觸し升すでに去年の春西國邊の百姓一揆ハ此等の事から起たと申升僕もそんな馬鹿なことハなかろうどハ思へども銅線にて百里も二百里も先へ便りが出来二十里三十里

乃道を纔一時か半時ふ往復せらるゝを見ぢハ誠ふふしぎなく成程切支丹乃仕法かと思ひ外殊ふある物識の話ふ鉄道だの傳信機ハ西洋人乃國の中ふある野山が幾萬里とふ果なき大國ふハ重宝なれど日本乃如き小國ふハ無用な物ぞその譯ハ日本のぐるりハ盡く海ゆゑ急な用事ハ蒸氣船ふて足りその外ハ日本船ふて澤山また文通ハ飛脚や八托のバ果かく果まて二十日の三十日ふて届くもけ五畿までそむふふく沢山用便ふおつりて居りしところ今急ふ長崎横濱箱館の

便が一日の中に知れるゆゑそれほど頼むべき用事もなく落入るところ無益な物でござるけれども無益のことではなく商人などにハ大不為になる是まてハ諸國の相場が急に知れざるゆゑ大坂の米を東京へ積送れバ利があり松前の鰊を上方へ送れバ儲がありしてけしてござるそれを鉄道や傳信機が出来てハその土地の人でも忽ち諸方の相場を知るゆゑ他の商人が買出しに行ても安直にハ賣られ自然商賣が衰微する種だと云話なきつくがさうせハ表むきだけでござる

人にいたせ鉄道や傳信機なとゆふ物ハ切支丹乃魔法にて出来しを以て日本人乃膽を挫きつひに日本を甘くせしめむとふ西洋人乃悪斗でござる云ふにある方乃流言の通り日本にとつてハ無益な物なるを政府でハ更に流存じなくゆく／＼ハ日本國中鉄道傳信機乃充満するやうなすまゐものなしと誠に／＼痴獣とも白痴ともいやうのなき事にて其の雇手抔ハ悔しく思ふ入齒を齧碎ように覚えて升

開次郎

舊弊君失禮ながら足下の話ハ皆深き理合を知んなさらぬなどてござる先蒸氣車といふものハ蒸氣乃力て走る車なれバ一合乃水を沸騰せ全く水がなくなれバ一石七斗の蒸氣となる即千七百倍乃容てござるかく非常に膨脹たる蒸氣を捕へシリンドルといふ鉄製乃筒乃中に入れその發力を縮りて車を運轉させる仕掛てござるその器械を仕掛し車を機關車と名付一つ乃機關車よく他の車二十輛乃至四十輛も引ことてござるさて車乃製造ハ皆大丈夫なる鉄乃

輪四ツ宛をつけたる造り方ゆゑ尋常の道を走ること
が出来ませんそれゆゑ別ニ道を平にし車輪の當る
ところニ巾二寸厚サ四寸許の鉄を二條填め常ニ其
の上を往来するやうにしたるがいはゆる鉄道でござる
又傳信機とハヱレキトルの氣力によりて音信を通
ずる仕掛てござる其のヱレキトルといふ氣ハ天地間の
萬物ニ備ハりある一ツの氣なるゆゑ磁石が鉄を吸ふ
ハ此力のあるゆゑにしてござるさて傳信機の仕掛
ハヱレキトルマグ子ツトとて鍛鉄の棒とガルバニツ

クバッテリー」といふ銅と白鉛を入れたる箱を以て
エレキトルの氣力をおこしたせを彼是の間にちり
ぢらしたる銅線のはじに通ずれば道の遠近にかゝ
はらず直に先方に通ずるゆゑにて此方なる銅線の
はじをイの字の所へ當れば先方なるも同じくイの字
をつき口の字へ當ればロの字をつらくゆゑにその働自由
自在なれば恰も對面して話をするやうでござるさて此
等の事は前に申したる窮理學といふ學問を學べば
忽ちわかることなりナント かゝる道理を知人なきまつしく鈔、

道や傳信機ハ切支丹でもなくふしぎでもなきゆゑかまひ又鉄道ハ日本のやうにめぐり海なく船の便利かよき國柄でハ無益だの音信ハ是迄の飛脚にて事足りる傳信機ハ余計さ抔いふ事ハミな偏屈な理をしらぬ人の言葉でござる第一西洋でも英國抔といふハ國ハ日本より少し小さき位なる矢張島國でござるゆゑに國中惣躰鉄道乃長サを積れバ殆んど四千里に及び傳信機ハ何所も蜘蛛の網を張るやうに引架しあるによつてさすれバ舟の便利よき國柄にても鉄道

傳信機ハ必用な物だと思ハます譬へハ東京と横濱の間を川蒸氣おて往來すれハ稍く一日ニ兩度位のまとてもぎやう、それが鉄道が出来てからハ一日ニ十度ハ往復が出来升ナント便利てハござりませんか又音信も是迄ハ稍く一日一度のところが傳信機ニなつてハ烟草一服吸ぬうちニ返事がまゐる實ニ便利といふも舌を巻ほかござり升それ故商賣乃繁昌ハいふニ及バぬ大事病氣ニも忽間ニあふといふも是皆鉄道傳信機の德濱でござる又山國でハ是迄運送の不便なるより出来

重き産物も捨置て骨を折らぬ場所がござるそれ迄
が鉄道傳信機が出来運送が自由になれば我勝に
骨を折り産物を積出す工夫をなすゆゑ自然産物
も殖え民百姓も饒富になる理なり且馬の脊を以
て運送するよりも鉄道の方がはるかに安價銭なれば
おのづから産物の直段も下落をいたしてござるナント
此等を考へたらば鉄道傳信機は國を富し民を饒
富まするには必用な物ではござらぬかさて〱鉄道傳信
機が出来れば商人の儲がなくなり商賣が衰微せ

るとハ沙汰乃かぎり誠にあきれて口が閉げません
何故といふに物乃相場といふ物ハ時乃景気によりて
高下ある物ゆゑ中ゝ人力を以て自由になるわけにハ
ゆかぬものとておぼゆる譬へハ豊年にハ誰も米の直段ハ
追ゝ下落するであらふと考へるゆゑ米所持乃人ハ我
勝に売らん事を競ふ是に於て米相場ハ益ゝ下落
いたし升凶年にハこれにかハり追ゝ米が払底になるらん
と思ふゆゑ人ゝ蔵へ積込おきて高直を待て売出
さんとしてそれゆゑ益高直になるさすれバ何れ乃土地に

てハ品物が澤山ふて賣人が多けれバ直段の下落ハ必定のことでござる尤鉄道傳信機が出来れバ是迄とかゝり日ゝ諸方の相場が知れるゆゑ買人の集り方も自然とはやくなるゆゑ相場高低の間の日数も是迄のやうに永くいらざる訳になりますれども商人が平常ふ油断なく諸方ふ氣を配りよく勉強さへすれバ萬事便利のよきことゆゑ昔しよりも儲ハなお多くあるべき筈でござる且商賣といふものハ千両の商ひを一度ふして百両の利を得るよりも千両の商ひ十度

して百両の利を得る方が品物の賣方もよく金銀の融通もよき理にて如何程當人の為になるかしれませんそれをしらぬまでの商人は一年に一度か二度の商賣をやりし一際に濡手で粟を攫むやうなる儲をせしめやうといふ懶惰者のみ多かりし事だがこれからはそんな手ぬるきことでは間に合ぬゆゑおのづと商賣に勵む心になり一年に百度も二百度も商賣をするやうになりませうさうすれば品物の賣方もよく又金銀の融通もよくなる理合にて獨り商人の幸ひでは

けつく天下一般の幸福てハござりませんからぞその源を
考へ是ハ鉄道傳信機の御蔭でござる

舊平

段々の法理解誠に感心いたしました実に足下の法活
の通り当時政府の法政事といふものハ皆民百姓我々
の安穏に暮さるゝ金銭が沢山儲かるし沢山歓楽が出
来るゆゑふしぎの法趣意だといふものハ丁銭とやかく恰
も夢の覚さくやうに思ハ是非今迄ハなくな道理のあ
る事どもハ露ともしらず只当時の事ハ皆異風すこく悪し

きたしろのゝ思ひ政府の法政道を彼是ろう〳〵や上足下ニ對しても僻論を唱へましたるけみとく今更なんとも恐入面目なき次第でござる

開次郎

僕の愚論が法胸ニ落ましたかそれまでなを僕も法話した甲斐があつてよろこばしうござる今の世の中の風俗といふものハ唯なんの譯もわからんで首贅ニ昔しの事を悪くいひ當時の流行を真似る人抔が多いのニ足下い心底天子様の為を思ふといふから新規の物事

をえらいものと思ハれ彼是法論もいひ聞らされし事
てござるそれが僕の話が法胸ニ落入りサラリと以前
の法論を棄てきまひなさッと所ハ真ニ日本人の氣象
なく貴い法心感心いたしましたそれて段々法話した様な
なれどかゝ銘々皆政府の法趣意を守り勉強さへすれ
ばいかな程面白樂しくも出来いかな程貴き身ニもな
なまけるなとなく〳〵　ナンー　舊平君よく〳〵考へて見るニハ
涙の流されるなど有難法時節てハござらん人か

開化問答巻下終

2812-372 v.2

明治七年三月新刻

日本橋通三丁目
丸屋善七

須田町
冨城屋藤兵衛

同
和泉屋勘右衛門

東京書肆